



日本PTA北海道ブロック 研究大会札幌大会

参加報告書

令和元年10月12日(土)、13日(日)

小樽市PTA連合会

札幌大会概要

◇大会スローガン◇

【親の実りは 子どもの実り】

～家庭・学校・地域のより一層の連携を目指して、学び合いましょう～

◇大会主題◇

【ふれあい つながり 学び合い】

～子どもたちの将来に責任をもてる社会をつくるために～

- ①主催 日本PTA北海道ブロック協議会
(札幌市PTA協議会、北海道PTA連合会)
- ②主管 札幌市PTA協議会
- ③後援 公益社団法人日本PTA全国協議会 文部科学省 北海道 札幌市
北海道教育委員会 札幌市教育委員会 北海道小学校長会 札幌市小
小学校長会 北海道中学校長会 札幌市中学校長会 北海道公立学校教
頭会 札幌市小学校教頭会 札幌市中学校教頭会 公益社団法人日本
教育会

④参加者 1229名(大会要項参加者名簿より) ※小樽市の参加登録数26名

⑤大会日程

《第1日目 分科会》10月12日(土)

会場：ロイトン札幌 札幌市教育文化会館

12:20 13:00 16:30 18:00

受付	開会式・分科会	移動	情報交換会
----	---------	----	-------

《第2日目 全体会》10月13日(日)

会場：教育文化会館

9:00 9:30 9:45 10:30 12:15

受付	アトラクシ ョン※	全体会	記念講演	閉会 行事
----	--------------	-----	------	----------

※HBCジュニアオーケストラ

分科会一覧

【第1分科会】組織・運営

分科会テーマ「PTAとコミュニティ・スクール」～地域とともにある学校づくり～

提言1 「子どもたちの健やかな成長を願って」

提言2 「地域ぐるみで子供を育む仕組み作り～登別市版コミュニティ・スクールの取組～」

【第2分科会】家庭教育

分科会テーマ「子どもとのかかわりを深める会話力」～子ども食堂とコーチングをヒントに～

実践発表1 「ていねコミュニティカフェめりめろの子ども食堂の紹介と食を通して交わす会話」

実践発表2 「会話を豊かにするコーチング」

【第3分科会】学校支援

分科会テーマ「学校がもっと元気になるPTA活動」～学校支援のあり方～

提言1 「学校に行こう！」

提言2 「子どもを育てる 家庭・地域と学校の協働による取組」

【第4分科会】地域連携

分科会テーマ「明日の地域を支える子どもたち」～地域連携の中で子育てを～

提言1 「ふれあいから生まれる安心感、ふれあいから生まれるあこがれ」

提言2 「子どもを中心に連携を深める学校・保護者・地域」

【第5分科会】食育

分科会テーマ「子育ては食育から」～食べる力は 生きる力～

提言1 「食材をテーマとして食育のあり方」

提言2 「すがたをかえる大豆」と食育

【特別第1分科会】中学生討論会

分科会テーマ「夢に向かって一歩踏み出そう！」～失敗を恐れず挑戦する勇気～

講演 「好きなことをやって良いんだよ！」

ワールドカフェ形式による討論会「学校生活・社会問題・地域について」

【特別第2分科会】情報教育

分科会テーマ「必修！プログラミング教育！？」～導入期に 望ましい理解とかかわり方を～

基調提言 新学習指導要領が願う 子どもに育てたい力と「プログラミング教育」

授業提言・パネルディスカッション

記念講演

演題 「子どもの心と言葉を育むには」

講師 酒井 邦嘉 氏 （東京大学大学院総合文化研究科教授）

大会に参加して（感想・レポート）

第Ⅰ分科会 組織・運営

「PTAとコミュニティ・スクール」～地域とともにある学校づくり～



寿都町の事例では、地域は「職業体験・救急救命・ライフスキルなどの学習」を通して学校を支援し、学校は「町クリーン作戦・福祉施設訪問・募金活動」などで地域に貢献することで、学校と地域がつながりを深めていることが紹介された。この活動がCSを推進する力の源になっている。「子どもたちがどんな大人になってほしいか」を念頭に置いて、CSへの理解・参画を進めている。

登別市立幌別西小の事例では、CSを立ち上げ、推進していく過程で重要なのは人材の確保とCS活動の継承であり、そのために教育委員会の地域コーディネーターの支えが不可欠であるとの発言が印象的だった。また、活動のマンネリ化を防ぐことも大切で、前年度とは少し違う活動（活動のマイナーチェンジ）を心掛けているようだった。（中学校・男性）

この度、道P札幌大会において、積極的にコミュニティスクール（以下、CS）を取り入れている地域から、先進的な取り組みの実例に触れる貴重な機会として第一分科会に参加させていただきました。その中で、地域のCS構成員の人材発掘やCSの形骸化、という懸念事項もあげられてはいましたが、CSは学校運営ばかりではなく、人と人の接点が減少している現代において、生徒が



地域や地域の人と触れる機会が増えることで地域の活性化にもつながる、という利点も大きく取り上げられていました。CSの立ち上げは行政と地域と学校の連携が不可欠、ということではありますが、地域一丸となって子供たちを育てるCSは、子供たちにとって多方面から豊かな教育を受ける良いきっかけになる、と感じました。（小学校・男性）



第2分科会 家庭教育

「子どもとのかかわりを深める会話力」～子ども食堂とコーチングをヒントに～

「子どもとのかかわりを深める会話力」をテーマに、ていねコミュニティカフェめりめろ代表の藤原美由紀さん・日本メンタコーチ協会認定メンタコーチの上田昌史さんの発表がありました。藤原さんの発表では、めりめろの活動について知ることができました。その後のグループ討議で、参加者の地域にある子ども食堂の現状や課題について話し合いました。上田さんの発表では、隣の席の方とコーチングを実践しながらの時間でした。面識のない方同士も和気あいあいとコミュニケーションを図ることができ、コーチングの成果を体感しました。皆さっそく実践したいと話されており、もっと多くの方に知ってもらえる機会ができればと思いました。（中学校・女性）



第3分科会 学校支援

「学校がもっと元気になるPTA活動」～学校支援のあり方～

- ・親の参加行事が多い学校と少ない学校
- ・親の協力姿勢が多い学校と少ない学校

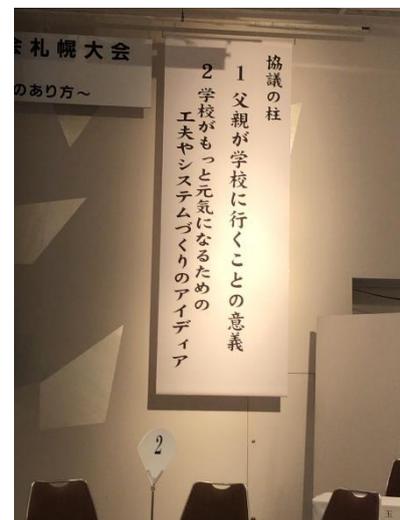
どちらの意見も聞いてわかったことは、

- ・親同士のコミュニケーション
- ・親と先生たちとのコミュニケーションがあるかないかの差でした。



学校が元気になるためには、もっともっと親同士、親と先生たちが仲良くしなきゃならない！！とすごく考えさせられる1日でした。

貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。楽しかったです。
(中学校・女性)



第5分科会 食育

「子育ては食育から」～食べる力は 生きる力～



南区でPTA 連合会員に食に関する アンケートを行った結果、どこの家庭でも朝ごはんの悩みがあることに気がつきました。それに対して理想と現実は違っても食べていればよし、と割り切るとあり、心の負担が減りました。また、小学校での残食問題から豆腐が残ってしまい、仕入れ先の豆腐屋さんに協力してもらい、実際に3年生を対象に3,4時間目に豆腐作りをしています。まずは、豆腐のことを知ってもらいたいと思っての行動です。出来立ての豆腐を食べることで、いままで食べたものと違う！と驚いてくれ、その後の給食の残食が減ったそうです。小樽でもそのような取り組みができると良いなあと思いました。その後のワールドカフェ方式でのグループワークも色々な地域の人と会話することができ、とても有意義な時間がもてました。参加する機会が持て、良かったです。（小学校・女性）

「食育」がテーマだった事もあり、生産者の方、子どもの多い方の参加が多かったように思います。

同席だった十勝の方は酪農業をされている6人のお子さんの父親でした。

提言者の石田食販(株)代表取締役の恩田さんは、15年前学校給食の大豆商品を納品していた小学校の栄養士さんからの相談で、給食の豆腐料理の残食が多い事を知りました。「食育の授業で何か話を出来ませんか？」と言う事から、豆腐作りの大変さを知ってもらう為に豆腐作りの授業を始められたそうです。

大豆から豆腐作りが出来ていく体験をした子ども達の喜ぶ姿、出来たての豆腐を美味しく食べる様子を見て、また、後日豆腐料理の残食が減ったと言う報告に授業をやった甲斐があったと思われたそうです。

グループワークでは、自己紹介をしながら各家庭での食に関する話題で盛り上がりました。私自身、子どもの頃嫌いだった、「白和え」を大人になり突然食べたくなくなり、母に作って貰って食べてみて、あんなに嫌いだったのにすごく美味しく思え、懲りずに作ってくれていたことで舌が覚えてる、記憶に残っていると言う事に感謝でした。

今の子ども達にもそういうことを伝えて行きたいと言う話をした所、皆さん共感してくれ、子どもへの食育に対する保護者の方々の想いが伝わりました。

朝食にホットプレートをつかい、パン、たまご、ウインナー等、子ども達で焼いて食べるという工夫をされてる方も数名いたようでした！

途中でテーブルを変わるように指示もあり、より沢山の方々と関わる事もでき、とても楽しく、良い時間を過ごすことが出来ました。（小学校・女性）

特別第1分科会 中学生討論会

「夢に向かって一歩踏み出そう！」～失敗を恐れず挑戦する勇気～

- ・講演「好きなことをやって良いんだよ！」
- ・ワールドカフェ形式による討論会「学校生活・社会問題・地域について」



講演は、中卒で起業している39歳のIT関係の青年実業家のお話だった。

よく通る声で熱量を感じられる語り口。小気味いい。

彼は言う。

人生は1度しかない。

人生は、“ドラゴンクエスト”だ。

人生のロールプレイングゲームのコントローラーは、自分で持っているか？親が持っているか？

彼の現在（いま）を察知し、未来を押し量る力は素晴らしい。

彼は、さらに畳みかけるようにこう言う。

今は第4次産業革命の真ただ中だ。

それに伴って10年後、今ある職業のほとんどがなくなる。

君たちは（行きたくなければ）高校に行かなくてもいい。

何をやってもいい。どんな道に進んでもいい。

ただし、自分のコントローラーで本当にやりたい道に進んでほしい。

これから何が起こるか分からない予測不能な社会が待っている。

親自身の経験は、子供世代には通用しない。

非常識が常識に、常識が非常識になる時代がすぐにやってくる。

親は、自分の経験を子供に押し付けて、子供の可能性をつぶさないでほしい。

経験が豊かな大人の言うことは、正しいものとして受け入れることが私たち親世代の常識だった。

彼の話は、そんなパラダイム（枠組み）はもう役に立たないことを示唆している。

親も昔の常識だけに胡坐をかいて子供を育てるのではだめだ。

親も、彼の言う「情報を浴びる」＝日々更新される社会の変化を学習する＝ことが必要だ。これは、大人だから、子供だからということではない。

高校・大学だけが豊かな生活への道だった。しかし、今はそうではないことを彼は教えてくれた。

後は、親が腹をくくってこの考えを受け入れ、実践できるかどうかにかかっている。（中学校・男性）



今回の中学生討論会は、グループ討議「ワールドカフェ」を活用した物で、私は、大人のグループに参加させて頂きました。

討議を前に講演して頂いた森田宣広さんの「好きなことをやっていいんだよ」と言うテーマのお話では、大人が忘れてしまいがちな自由な発想や自分の意思の大切さを改めて感じさせられました。なかでも「自分の人生のコントローラーは自分で持つ」と言う言葉は、とても印象的で、親としても1人の大人としてもとても考えさせられました。

グループ討議では、講演を聞いた感想や子供の将来の夢について保護者の目線で意見交換を行いました。



「好きなことをやらせてあげたい」気持ちと将来のことを考えるとつい「安心」や「安定」を望んでしまう保護者ならではの悩みなども共有することができ、親として子供とともに現代社会に着いていけるように成長しなければいけないということを感じました。

貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。（小学校・女性）

中学生討論会「夢に向かって一步踏み出そう！」では、まず初めに講演「好きなことをやって良いんだよ！」を聴き、講師の先生のパワーあふれるパフォーマンス、観衆をひきつけるプレゼンテーションに、その場にいた大人も子どもも惹きつけられました。

内容はご自身の経験を赤裸々に語られ、その中でも「学歴が自分の人生を左右するのではなく、大事なことは自分の好きなこと、やりたいことを頑張れば、自分のように人前で話せる人間になる」という言葉が印象に残り、大変勇気付けられました。

また、話の中で「親は子どもをコントロールしていないか？」ということを私たち保護者に向けてメッセージをいただきましたが、無意識にコントロールしていることがあるのだ、知らず知らずのうち子どもを自分の枠組みにあてはめようとしている言葉を発していることに私自身、気づかされました。

討論会では、ワールドカフェ方式という、メンバーが一つのグループにとどまることなく、場所や人が変わっても意見を交換し合えるグループワークで、子どもたちの“持っている力”を感じる場となりました。どの中学生も等身大の自分達の考えをきちんと持って相手に伝えることができている、とても感動し、自分の子どもの“力”を信じる、見守ること、引き出すことの大切さを再認識できました。

このような貴重な後援や討論会に参加させていただいたことを心より感謝いたします。ありがとうございました。（中学校・女性）

特別第2分科会 情報教育

「必修！プログラミング教育！？」～導入期に 望ましい理解とかかわり方を～
・基調提言 新学習指導要領が願う 子どもに育てたい力と「プログラミング教育」
・授業提言・パネルディスカッション

プログラミング教育について、文科省の教科調査官の立場から説明があり、知っていることを使って何ができるようになるのか、楽しく体験しながら情報活用能力を養うなど、概要について理解することができた。また、実際にプログラミング教育を実践している先生から模擬授業を受け、ソフトを使って思考する、周りの方々と話し合う中で解決策を探る等、パソコンを操作する中で、育てたい力を実感することができた。（小学校・女性）



情報交換会・アトラクション



1年ぶりの参加でしたが、札幌の皆さんの「おもてなしの心」を、十分受け止めて来ました。

情報交換会では、ホテルの料理もさることながら屋台特設コーナーでは、全国でも有名な「らっきょ」のスープカレーや、「洋菓子きのとや」のデザートが振る舞われ（私は2回おかわりをしました）大いに満喫しました。料理が美味し

いので、当然に会話が弾みました。

また、札幌の皆さんの余興のパフォーマンスにも圧倒されて、いつまでも余韻に浸っておりました。少し残念なことは、テーブル席が他地区のPTA方々との相席の方がより情報交換が出来たのではないかと思います。

この大会でたくさんのお話を学ぶことが出来て有意義な時間を過ごさせていただいたことに感謝いたします。ありがとうございました。（中学校・男性）

HBC ジュニアオーケストラによる生演奏を体験しました。自分にとって生のオーケストラ演奏を体験するということは、人生初の体験だったと思います。管楽器中心の演奏会を体験したことは過去にもありましたが、今回は弦楽器が中心の演奏で、奏者は小学校4年生から高校3年生までの方々と、今回は最上級生が引退したということでした。しかし、演奏を聴いていると皆さん落ち着いていて、全体に一体感や調和がとれていて、この演奏のためにたくさん練習と努力を重ねて臨んできている事が実感できました。



目で見て、耳で聴いて、音の振動を身体で感じることができ、心も動かされ感動しました。

改めて音楽の素晴らしさ、人と人の繋がり大切さを全身で体感できたアトラクションで、短い時間でしたがとても充実した体験ができました。（中学校・男性）

記念講演

演題 「子どもの心と言葉を育むには」

講師 酒井 邦嘉 氏 （東京大学大学院総合文化研究科教授）

○すべての基礎は言語力から

- ・母語だけでは暗黙の了解が盲点を生みやすい
- ・多言語で思考力を形成する～小学校で外国語活動を導入

○テーラーメイド教育のジレンマ

- ・生徒の意欲・理解力・運用力は千差万別
- ・教師の意欲・理解力・指導力も千差万別
- ・教師が生徒の個性に合わせるテーラーメイド教育は公教育でどこまで実現できるか
- ・一律の公平な指導では限界がある
- ・到達度（出題範囲）を一定にすることに問題がある
- ・教育の先に学問・芸術（際限なき奥深さ）を位置づけ、各生徒を一步ずつ伸ばすことが理想

○自然習得のすすめ

- ・人間本来の生得性を正しく認識したい
- ・生得性は学習を必要としない能力のこと
- ・生得性を知らずに無理に押し進めようとする教育や訓練では歪みを生じる
- ・教育の真の目的は、自立性の基礎となる生得的な能力を引き出すこと

- ・チョムスキーの言語生得説を基礎とする自然習得こそ理想の教育

○落伍する子を出さない教育

- ・日本中の子供が日本語をしゃべっている＝日本語をしゃべれるようになるそのような教育法が素晴らしい
- ・鈴木メソッド「母語教育法」～バイオリンの教育法を考案

○言語と音楽の共通性

- ・詩の暗唱は難しくても歌って覚えれば簡単！
- ・音声は情報が豊かなので、言葉や音楽は耳から覚えたほうがはるかに自然で理にかなっている
- ・テキスト（文章などの内容）を文字で暗記するのが難しいのと同じで楽譜を暗譜するのは難しく自然にできることではない～言語習得の場面でいうと、文字から入ると難しい＝音から入ると習得しやすいということ
- ・好きこそものの上手なれとは一芸に秀でること
- ・効率よりも謙虚に鍛錬を続ける向上心が大切～効率よりも努力を継続する向上心！

○鈴木メソッドは先生と生徒と親

- ・練習には親に同席してもらおう～弾かない親がいて、自分ができなくてもいいんだ（「できない第三者」がいることが重要）

○2より3以上という哲学

- ・「自と他」では「全か無 all or nothing」と同じ→3以上で初めて自分も相対化される
- ・2分割から3分割になると全体の均衡が変わる→アンバランスが大切（非均衡、対称性の破れ）
- ・言語獲得のカギは「3語文以上」の段階→1～2歳児の初語（1語文）、2語文は飛躍への序章

○マルチタスクの効用

- ・同時に複数の作業をすること（脳に良い悪いではない）
- ・効率による評価は危険「長良」は功罪相半ば
- ・（東大生でも）聞きながらノートをとらない、書きながら考えられない学生が続出背景は、小学校の授業で一つに集中させる教え方の問題（「はい、話を聞く時間です！」というような先生の指示）
- ・マルチタスク（いっぺんにいろんなことを処理する）の例：料理、家事、運転
- ・音楽アンサンブルでも視覚・聴覚・運動をすべて動員
- ・パイロットや宇宙飛行士はマルチタスクの極致
- ・聞いて話すのも、脳にとって自然なマルチタスク（SNSでテキストを見て反応する＝シングルタスク）（講義ノートをタイピング（パソコン）でとるか、手書きでとるか）で知識の定着率が違う～手書きの方が定着率がいい

○電子化は教育の崩壊につながる

- ・紙の本には、ページの手掛かりが豊富（立体的、当たりをつけて探す・検索できる）
 - ・繰り返し読む学習に最適
 - ・一覧性にすぐれる（前のページがすぐ参照できる）
 - ・ノートへの手書きは要点を抽出
 - ・受動的なタイピング（ただキーボードを打っている）では思考の余裕がなくなる
 - ・過剰なネット依存は読書や会話を妨げる
 - ・能動性・自発性を失わせ、短絡的な反応を助長
 - ・考える前に検索する習慣が想像力を奪う
- （大学のレポート課題は意味がなくなっている＝検索で簡単に作れる）

○「無分別」のすすめ

- ・自他の区別による「分別智（ふんべつち）」は世俗的な人間の思考に過ぎない（仏教の世界観）
- ・別々に分けることだけでは理解に限界あり
- ・人間の本性は言語能力に由来し、芸術や学問も等しく言語能力を基礎とする
- ・無分別智とは分別を越えた絶対的な智

○脳をつくるヒント

- ・思考力（知性）＝言語力（理性）と創造力（感性）
- ・独創性の基礎には言語能力がある
- ・柔軟な思考を支えるのが言葉
- ・豊かな感性を生むのが心
- ・自律的に発達を続ける脳は内的な環境を与える（脳の成長に臨界点はない）（いくつになっても言語習得は可能）
- ・生涯にわたる読書や学習の蓄積が脳をつくる
- ・読書や教育の価値は「効率」にはない（短時間で教育の効果を上げるのは間違い）

○学芸における習得の普遍則

- ・最初は模倣に徹する（個性は封印する）→型がなければ誤りを認識できない
- ・どこまで表現の幅として許容されるかを知る→過ぎたるは及ばざるがごとし
- ・最後に適切な反復練習を通づける「向上心」→何事にも王道（楽な道）はない
- ・脳が必要な技芸に「自然と」目覚めるように誘う（個性を封印することは決して間違いではない）

○自然と人工の対立

- ・AIは何を伝えたいかまでは判断・表現できない（人間が人間であるが故の真骨頂）